

# 2017（平成 29）年度 学生による授業アンケート結果

## 1. 2017（平成 29）年度 授業アンケートの実施要領

### 1) 授業アンケートの対象科目

全ての授業形態（講義・演習・実験・実技・実習）の科目をアンケート対象とする。但し、受講者数 5 名未満の科目は担当教員が実施の可否を判断する。また、対象科目の選定に関する担当教員の希望はとらない。

### 2) 実施期間

前期：平成 29 年 7 月 3 日(月)～7 月 29 日(土)  
後期：平成 29 年 12 月 13 日(水)～1 月 22 日(月)

### 3) 授業アンケートの質問

設問 1. あなたはこれまでの授業内容を理解できましたか？（選択式：択一）

回答群 a: よく理解できた / b: まあまあ理解できた /  
c: あまり理解できなかった / d: 全く理解できなかった

設問 2. あなたは、この授業のどこが良かったと思いますか？（選択式：複択）

回答群 a: 機材・資料・板書 / b: 教員とのコミュニケーション /  
c: 受講者の数 / d: 授業の内容 / e: その他

設問 3. あなたはこの授業を受けるにあたって、シラバスをどのように活用しましたか？

（選択式：複択）

回答群 a: 授業の内容を確認するため / b: 授業の到達目標を知るため /  
c: 予習・復習に役立てるため / d: 評価基準を参照するため /  
e: 活用しなかった

設問 4. あなたは 1 回あたりの授業に対して予習・復習をどの程度しましたか？（選択式：択一）

回答群 a: 60 分以上 / b: 60 分未満 /  
c: 30 分未満 / d: 15 分未満 / e: 全くしなかった

設問 5. 授業をより良いものにするために、授業を実際に体験したあなたの立場から提案できることがあれば述べてください。（記述式）

### 4) 集計方法・区分

アンケート結果の集計は以下の区分で集計する。

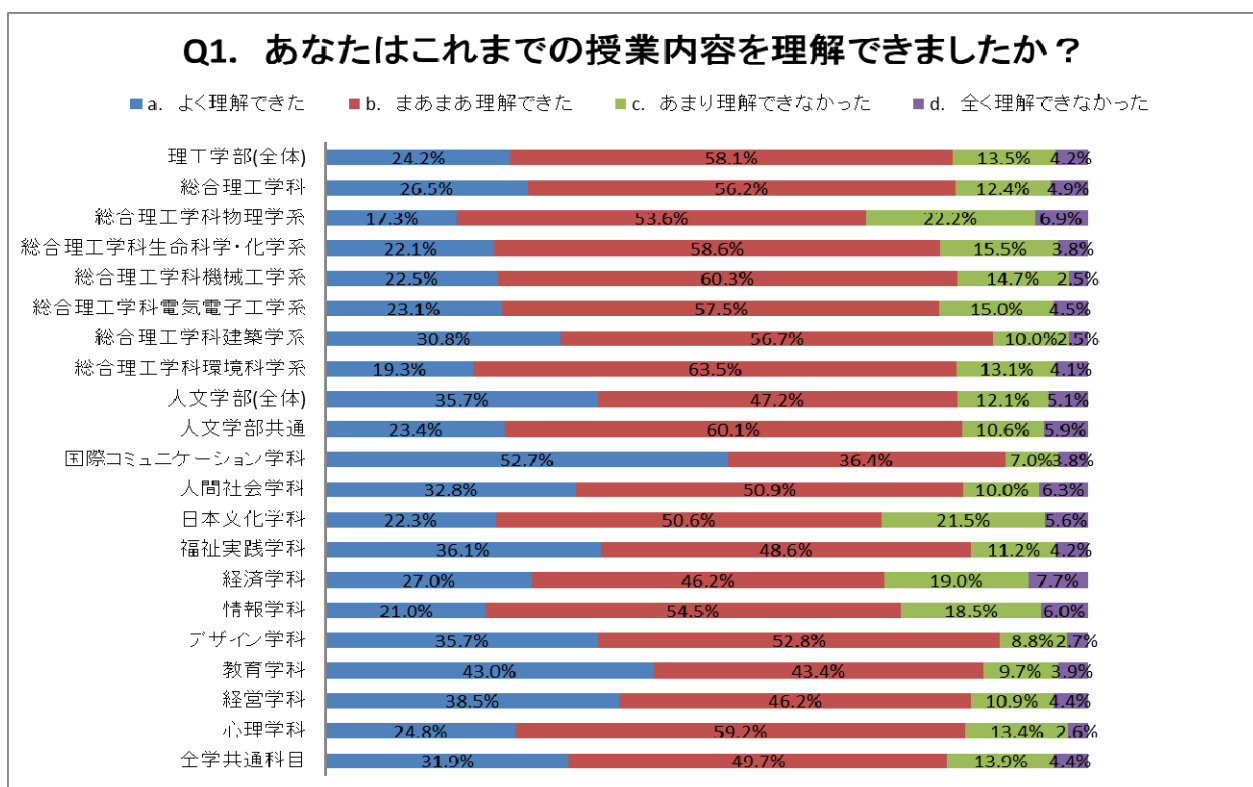
- ①授業科目区分別（全学共通科目、学部共通科目、学科科目、教職・資格科目）
- ②授業形態別（講義・演習・実験・実技・実習等）
- ③受講者数別（0～20 人、21～50 人、51～100 人、101～200 人、201 人以上）
- ④担当教員所属の学部別
- ⑤担当教員所属の学科・全学共通教育
- ⑥個人別

## 2. 2017（平成29）年度 授業アンケートの集計結果

### 1) 対象授業数・回答者数

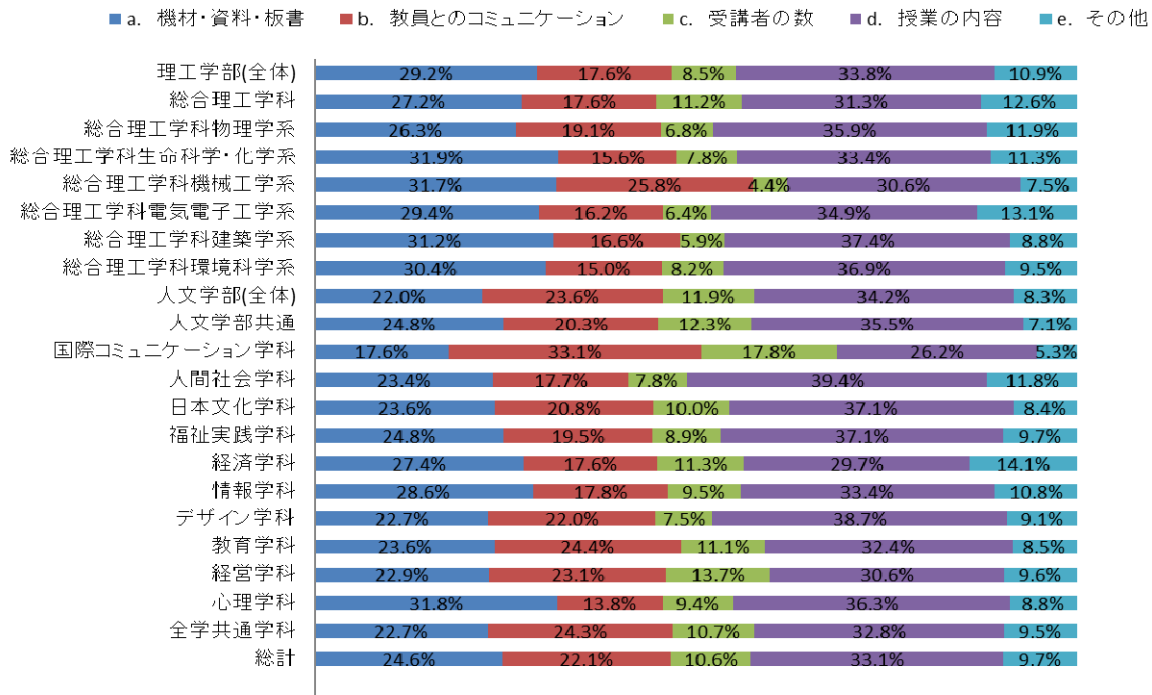
前期： 2447 科目（対象時間割科目数） 回答者数 37557（延べ数）  
 後期： 2361 科目（対象時間割科目数） 回答者数 23978（延べ数）

### 2) 前期集計結果



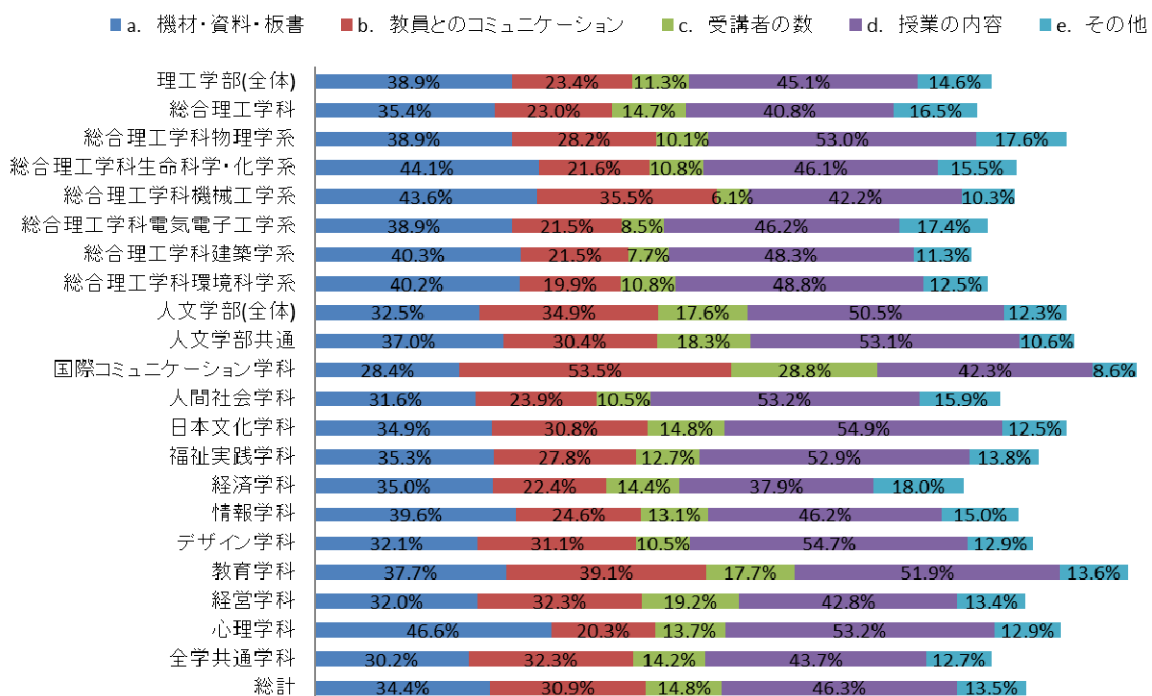
## Q2. あなたは、この授業のどこが良かったと思いますか？【複択】

※ グラフは回答数に対する比率(計100%)



## Q2. あなたは、この授業のどこが良かったと思いますか？【複択】

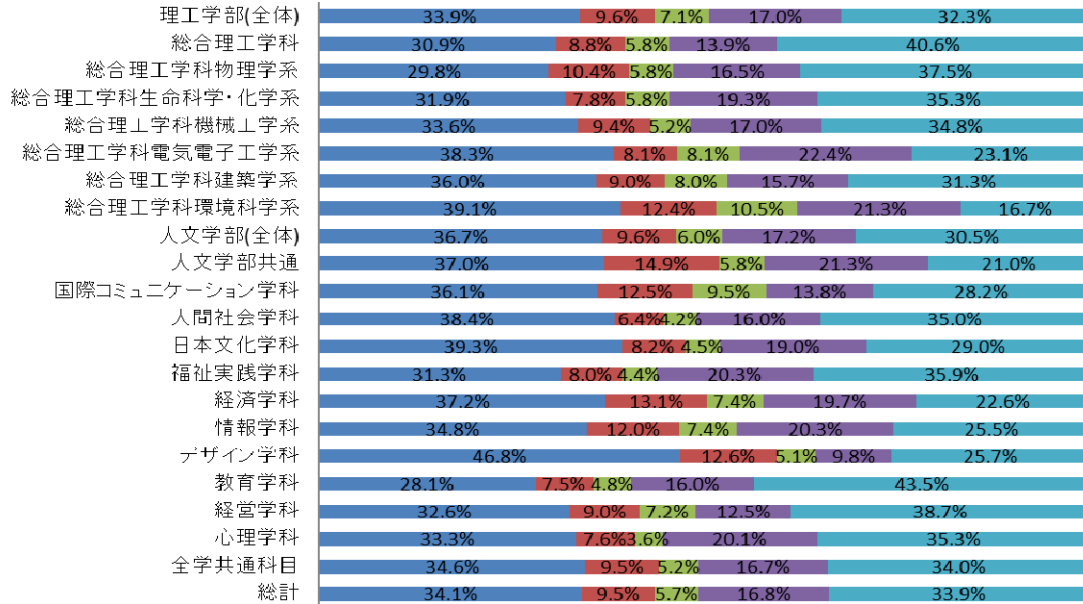
※ グラフは回答者数に対する比率



Q3. あなたはこの授業を受けるにあたって、シラバスをどのように活用しましたか？【複択】

※ グラフは回答数に対する比率(計100%)

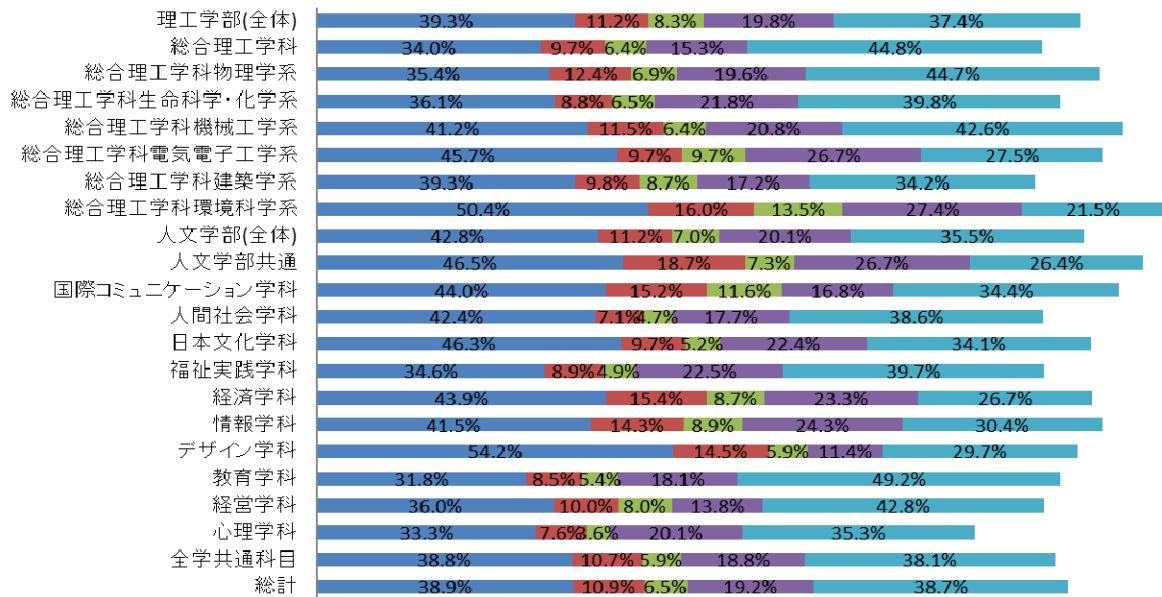
- a. 授業の内容を確認するため ■ b. 授業の到達目標を知るため ■ c. 予習・復習に役立てるため
- d. 評価基準を参照するため ■ e. 活用しなかった



Q3. あなたはこの授業を受けるにあたって、シラバスをどのように活用しましたか？【複択】

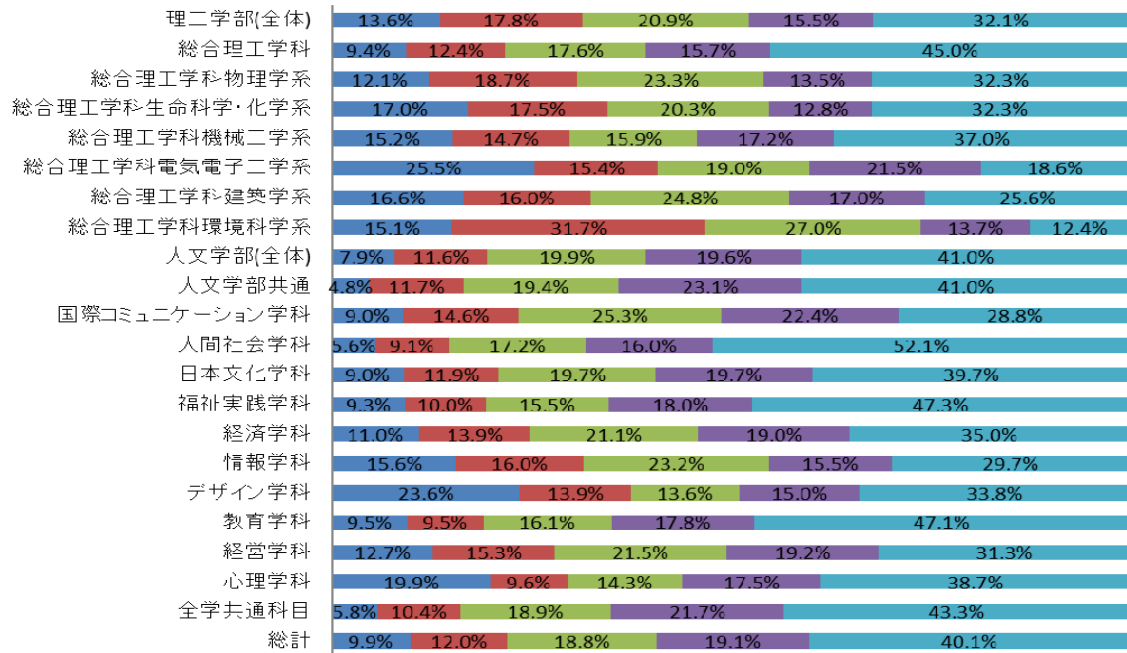
※ グラフは回答者数に対する比率

- a. 授業の内容を確認するため ■ b. 授業の到達目標を知るため ■ c. 予習・復習に役立てるため
- d. 評価基準を参照するため ■ e. 活用しなかった



#### Q4. あなたは1回あたりの授業に対して予習・復習をどの程度しましたか？

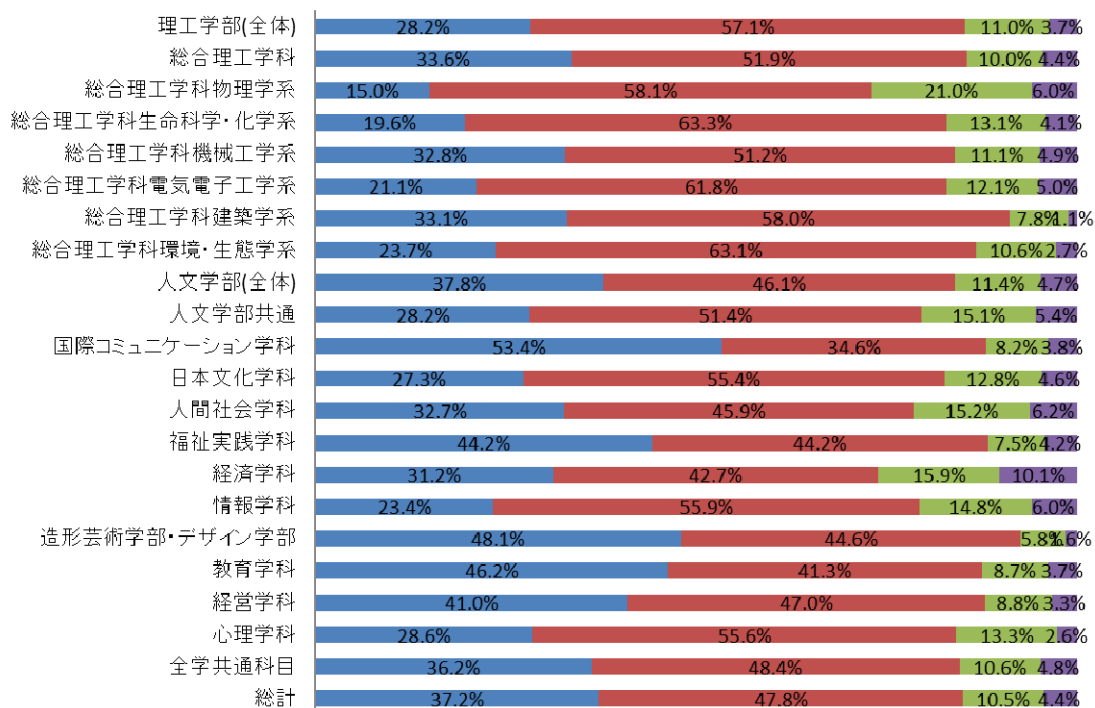
■ a. 60分以上 ■ b. 60分未満 ■ c. 30分未満 ■ d. 15分未満 ■ e. 全くしなかった



### 3) 後期集計結果

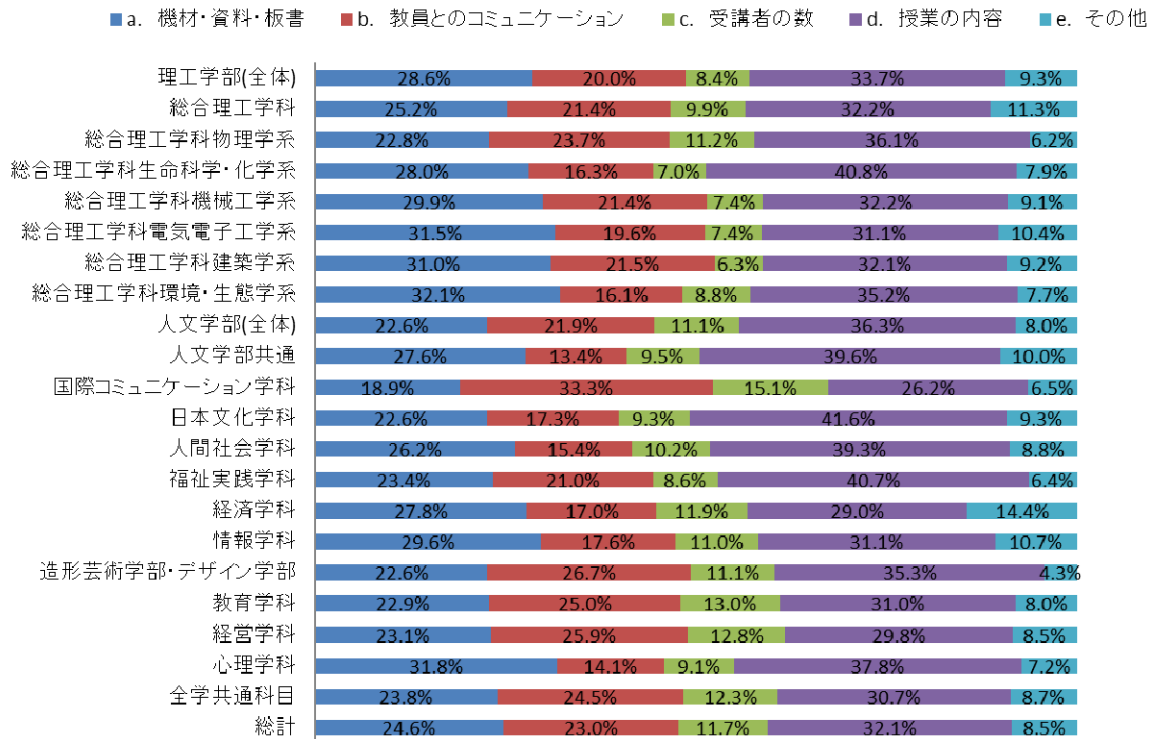
#### Q1. あなたはこれまでの授業内容を理解できましたか？

■ a. よく理解できた ■ b. まあまあ理解できた ■ c. あまり理解できなかった ■ d. 全く理解できなかった



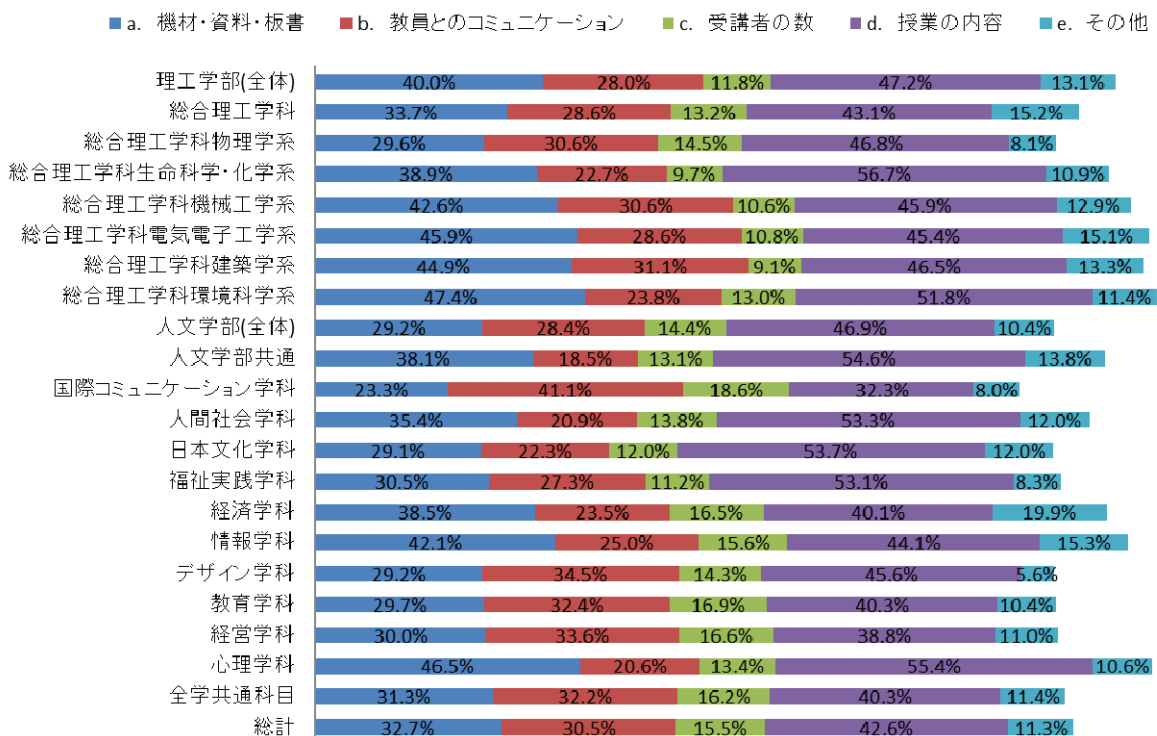
## Q2. あなたは、この授業のどこが良かったと思いますか？【複択】

※ グラフは回答数に対する比率(計100%)



## Q2. あなたは、この授業のどこが良かったと思いますか？【複択】

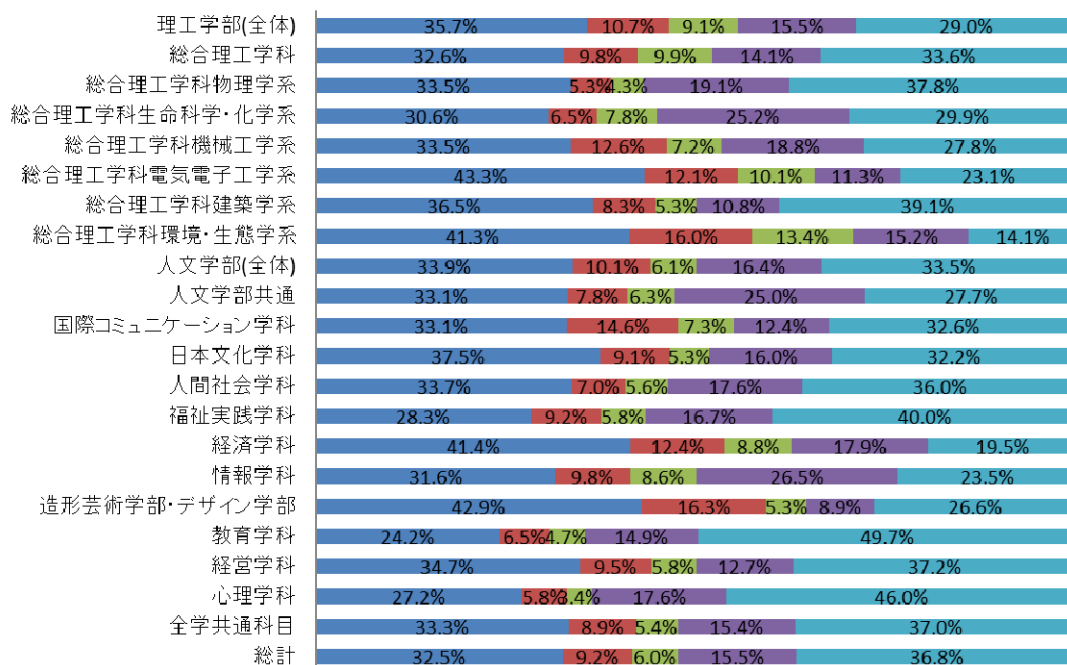
※ グラフは回答者数に対する比率



**Q3. あなたはこの授業を受けるにあたって、シラバスをどのように活用しましたか？【複択】**

※グラフは 回答数に対する比率(計100%)

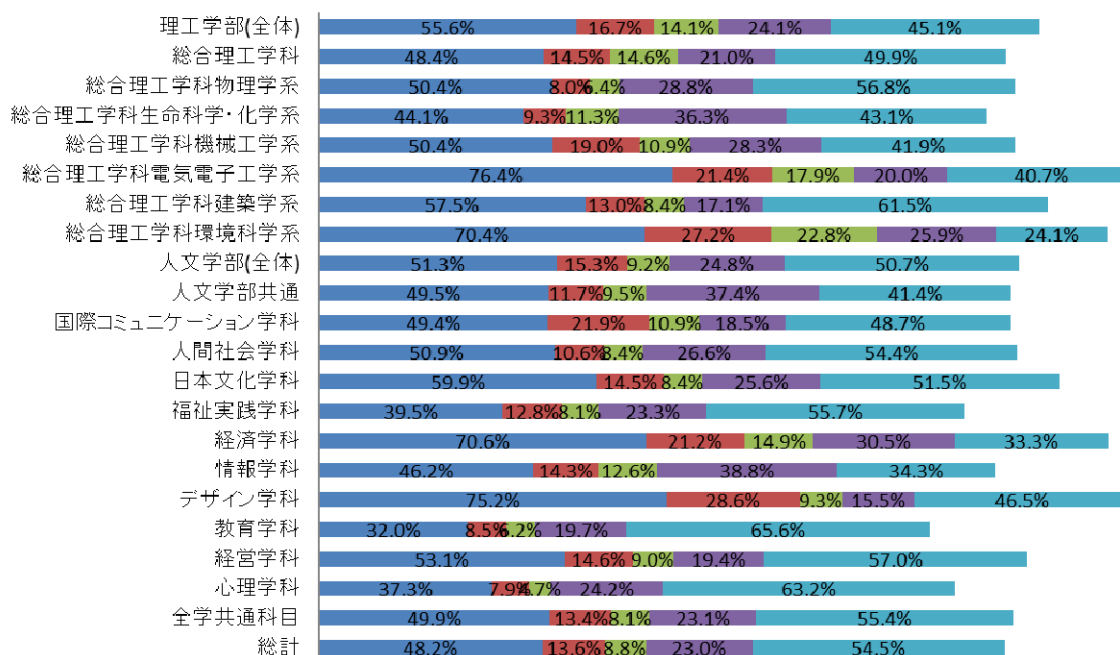
- a. 授業の内容を確認するため ■ b. 授業の到達目標を知るため ■ c. 予習・復習に役立てるため
- d. 評価基準を参照するため ■ e. 活用しなかった



**Q3. あなたはこの授業を受けるにあたって、シラバスをどのように活用しましたか？【複択】**

※グラフは 回答者数に対する比率

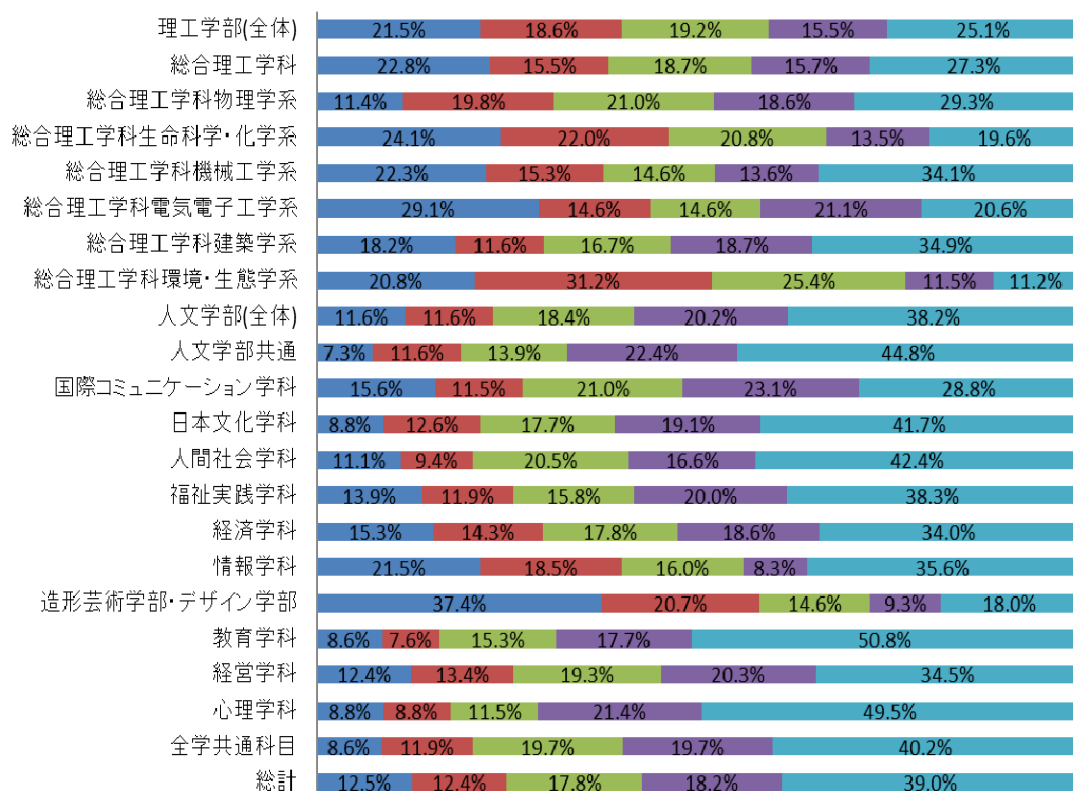
- a. 授業の内容を確認するため ■ b. 授業の到達目標を知るため ■ c. 予習・復習に役立てるため
- d. 評価基準を参照するため ■ e. 活用しなかった





#### Q4. あなたは1回あたりの授業に対して予習・復習をどの程度しましたか？

■ a. 60分以上 ■ b. 60分未満 ■ c. 30分未満 ■ d. 15分未満 ■ e. 全くしなかった



### 3. 2017（平成29）年度 授業アンケート結果の概要

#### 1) 全学の総評

#### 2) 理工学部

- ①学部長による総評
- ②総合理工学科 物理学系
- ③総合理工学科 生命科学・化学系
- ④総合理工学科 機械工学系
- ⑤総合理工学科 電気電子工学系
- ⑥総合理工学科 建築学系
- ⑦総合理工学科 環境科学系

#### 3) 人文学部

- ①学部長による総評
- ②国際コミュニケーション学科
- ③日本文化学科
- ④人間社会学科
- ⑤福祉実践学科

#### 4) 経済学部

- ①学部長による総評
- ②経済学科

#### 5) 情報学部

- ①学部長による総評

#### 6) 教育学部

- ①学部長による総評

#### 7) 経営学部

- ①学部長による総評

#### 8) デザイン学部

- ①学部長による総評

#### 9) 心理学部

- ①学部長による総評

#### 10) 全学共通教育委員会

- ①全学共通教育 委員長による総評

## 2017（平成29）年度 学生による授業アンケート結果の概要

### 全学の総評（前期）

以下に、2017年度前期に実施した授業アンケートの全学的な結果について総評する。学部学科ごとの回答結果を概観すると、例年と同様に数値に多少のばらつきはあるものの、いずれの学部学科（学系を含む、以下同様）も同じような傾向を示していることがわかった。その傾向は以下の通りである。

- (1) 質問1の「授業内容の理解」に関しては、大学全体の平均値を見ると、「よく理解できた」（32.4%）と「まあまあ理解できた」（49.9%）の合計が82.3%と高い数値を示している。それぞれの学部学科の数値を見ても、全体的には大学の平均値と同じ傾向を示している。これは前年度までの結果と同じ傾向であり、「授業の理解度」に関しては、引き続き一定の成果が上がっていると言ってよい。とは言え、「あまり理解できなかった」と「全く理解できなかった」の合計が25%をこえている学科（総合理工学科物理学系、日本文化学科、経済学科）があり、当該学科では早期の修学支援が求められる。
- (2) 質問2の「授業の良かったところ」に関しても、ほとんどの学科で同じ傾向を示している。すなわち、最も回答率が高かったのは「授業の内容」で、大学全体の平均値は46.3%（回答者数に対する比率、以下同）になっている。次に高いのは「機材・資料・板書」（全学平均34.4%）と「教員とのコミュニケーション」（全学平均30.9%）で、両者ともほぼ同程度の数値を示している。以上のことから、授業に対する学生の満足度はまずまずの水準にあると推測できる。こうした全学的な傾向の中、例外的に国際コミュニケーション学科の場合は、「教員とのコミュニケーション」（53.5%）が最も高い回答率になっている。これは当該学科のフィールドワーク等の授業の特徴を反映したものと考えられる。
- (3) 質問3の「シラバスの活用」に関しては、例年通り「活用しなかった」が38.7%と高くなっているが、回答率が最も高かったのは「授業内容を確認するため」の38.9%で、わずかながらシラバスの活用が進んだと解釈できる。とは言え、「活用しなかった」が最も高い回答率になっている学科がまだ多く見られることを勘案すると、今後の改善に向けてより一層の努力が求められる。
- (4) 質問4の「予習・復習」に関しては、昨年度と同様の傾向が表れている。全学的な平均値では「全くしなかった」（40.1%）と「15分未満」（19.1%）を合わせた数値が59.2%にのぼり、本学の過半数の学生がほぼ自習をしていない実態が示されている。今後ますます学生の主体的かつ積極的な学修が求められる中、昨年度に引き続きそれぞれの学科ならびに個々の授業でより多くの自習時間を促す工夫が求められる。

以上、大学全体の傾向から、本学の学生の授業に対する理解度と満足度は昨年度と同様に比較的良好であることがわかる一方で、その学修態度は未だ積極的なものになっていないことが認められる。近年同じ趣旨の総評を繰り返しているが、我が大学の学生が今後ますます複雑化と思われる社会において自ら課題を発見し、その課題に取り組む力を身につけることが求められるが、そのためにはより主体的かつ積極的な学修を行う必要がある。一方、授業を担当する教員には、そうした学修を実現するためにより良い学修環境を整えることが求められていると言える。

（全学FD委員会委員長 服部裕）

## 全学の総評（後期）

結論から述べると、2017年度後期の授業アンケート結果は、例年と同様にほぼ前期の結果と同じ傾向を示している。そうした中、前期と明らかに違う結果となっているのは、質問3（シラバスの活用）に対する回答で、「活用しなかった」（54.5%）が前期のそれを15ポイント強上回っていることである。これは学生の授業全般に対する慣れが反映された結果と思われるが、シラバス活用の意義をより一層周知することが求められる。その他の質問に対する回答結果は、すでに述べた通り、個々の数値のばらつきはあるものの前期と同じ傾向にあり、前期と連動していることがわかる。（個々の数値については、グラフを参照していただきたい。）そのため、シラバス活用も含めた改善には、特に前期科目に対して対策を施すことが肝要であると判断される。

（全学FD委員会委員長 服部 裕）

## 2)理工学部

### ① 理工学部長による総評

本授業アンケート各項目の回答結果について、学系ごとの特徴は、学系代表の講評を参考にさせていただくことにして、ここでは全学の総計と理工学部全体とを比較してみる。

Q1 では、両者はほぼ類似しており、授業内容を理解できたとする学生の割合（「よく理解できた」と「まあまあ理解できた」の和）は80%以上であり、一見、良いように見える。この結果は例年通りである。

Q2 に対する回答の傾向も全学と類似しているが、理工学部では教員とのコミュニケーションがやや低いように見え、機械工学系を除いて、15-17%くらいである。理工学部では実験・実習で、教員と個々の学生とのコミュニケーションが取れていると思われるが、講義においても双方向のコミュニケーションを意識するように心がけるとより良いかも知れない。

Q3 では、例年のように、1/3 以上の学生は、シラバスを活用しなかった、と回答している。また、Q4 では予習・復習を全くしない学生もおよそ1/3 存在する。教員は講義内でシラバスを提示し、シラバスを活用して予習・復習をするように促す必要があるように思われる。Q4 における予習・復習を全くしない学生が、Q1 の授業の理解度の高さを本当に得ているのであろうか、少し不安を感じる。

ここで開示されたアンケート結果は、理工学部ならびに各学系の概観に過ぎないので、各教員が担当する科目の結果を吟味することは当然であるが、学系代表・教務委員を中心に、自由記述を含めたアンケート結果を共有・精査して、学系として組織的な授業改善を図ることが重要であると考えられる。

最後に、過去3年間のアンケート結果の総評に記しているように、理工学部全体の回答数（前期4,756、後期2,724）を理工学部在籍学生数と学部内開講科目数から考えると、今回もアンケートの回答率は極めて低い。アンケート回答率が低いということは、その結果が一部の学生の動向のみを反映している可能性があり、アンケート結果を授業改善に真に役立てて行くためには、多くの学生に回答してもらうことが大前提である。これは、理工学部固有の問題ではなく、全学についても当てはまっており、本アンケートのやり方の限界であると考えられる。来年度から、授業アンケートの方法が変更になるようであるので、回答率が改善されることを期待したい。

（理工学部長 清水光弘）

### ② 理工学部 総合理工学科 物理学系による総評

本アンケートQ1で、「よく理解できた」と「まあまあ理解できた」の合計が、前期、後期で昨年度と比べるとそれぞれ66.6%⇒70.9、66.1%⇒73.1で、また、「あまり理解できなかった」、「全く理解できなかった」が33.5%⇒29.1、33.9%⇒27であった。授業の理解度は、昨年に比べ改善されているが、理工学部全体に比べると低い。これは物理学という学問の内容が関係していると思われるが、より理解できるように教員もより努めることが大切であると思われる。

Q2の「授業の良かった点」に関しては、「授業の内容が良かった」が比較的高いのは良い傾向である。

一方、Q3の「シラバスの活用」については、「活用しなかった」が、前期32.3%⇒37.5、後期34.2%⇒37.8で昨年より高くなっている。教員がシラバスの内容の充実に努めてきているが、シラバスを活用しなかった学生が多いため、教員、学生共に工夫、改善をしていく必要がある。

また、Q4の「あなたは1回あたりの授業に対して予習・復習をどの程度したか。」については、「全くしなかった」が、前期32.8%⇒32.3、後期36.5%⇒29.3と昨年に比べ後期で低くなっているが、3割ほどの学生が「全くしなかった」とあるのは、大学においても予習・復習は大切なことで改善していかなければならない。

（物理学系代表 合田一夫）

### ③ 理工学部 総合理工学科 生命科学・化学系による総評

Q1「授業内容の理解」に関しては、ある程度理解できたと認識した学生が83%、全く理解できなかった学生が4%であった。昨年度よりも改善されており、各教員の授業の進め方に工夫があったものと思われる。理解が不十分な学生が15%程度であったが、テストから判断すると、この数字は低い可能性もある。特に、初年次において基礎学力を習得させる効果的な対策が必要不可欠と考えられる。各教員が、受講者の弱点を把握し、理解を定着させる目的で演習問題を行うなど、基礎事項の理解度を習得できるよう工夫が必要と思われる。

Q2「授業の良かった点」に関しては、授業内容の評価の割合が41%と他学系より高いが、昨年同様、教員とのコミュニケーションの割合が他学系より低い点が気になる。他学系の授業内容を把握することは事実上、困難であるが、今後、コミュニケーションに留意して授業を進めることが必要である。シラバスの利用については、活用しない学生が30%と昨年より低下したが、有効活用されているとは言えない。この点を考慮し、初回の授業において、シラバスの内容に相当する授業概要、成績評価方法などに関する説明を徹底する必要がある。

Q4「予習・復習時間」に関しては、60分以上の割合が24%であった。昨年度は、15%程度であり、勉学への意欲の刺激が効果的であったことが反映された。全く予習・復習しなかった割合が、昨年は35.4%と高かったが、今年度は20%程度に低下している。次年度、この数値が更に低下するよう授業の工夫が必要になる。

(生命科学・化学系代表 田代充)

### ④ 理工学部 総合理工学科 機械工学系による総評

Q1「授業内容の理解度」に関しては、よく理解できたとまあまあ理解できたを合わせると前期82.8%、後期85.0%(昨年 前期84.6%、後期83.6%、一昨年 前期74.4%、後期83.7%)となっている。約17%の学生が理解出来ていないことになっており、引き続き工夫が必要となる。また、一昨年から、昨年今年と、理解度があがっているため、成果があるものの引き続き努力が必要である。

Q2「授業の良かった点」(複数選択、回答者に対する比率)に関しては、複数回答で「機材・資料・板書」が良かったと回答した人は前期31.7%、後期42.6%(昨年 前期38.8%、後期45.3%、一昨年 前期45.8%、後期54.0%)、「教員とのコミュニケーション」が良かったと回答した人は前期25.8%、後期30.6%(昨年 前期31.8%、後期44.1%、一昨年 前期37.0%、後期36.7%)、「授業の内容」が良かったと回答した人は前期30.6%、後期45.9%(昨年 前期50.7%、後期41.8%、一昨年 前期41.0%、後期43.3%)となった。特に「機材・資料・板書」については、年々低くなっており、教員の努力はあるものの、引き続き授業での工夫が必要となる。さらに「授業の内容」についても、60%以上の学生からの評価されるよう努力が必要である。

Q3「シラバスの活用」に関しては、「活用しなかった」と回答した人が前期34.8%、後期27.8%(昨年 前期36.4%、後期46.9%、一昨年 前期28.9%、後期43.2%)となり、特に後期では、数値が高くなってきており、昨年以上に教員からシラバスの活用を促す必要がある。

Q4「予習・復習の時間」に関しては、60分以上予習・復習している人が前期15.2%、後期22.3%(昨年 30分以上 前期24.1%、後期31.7%、一昨年 30分以上 前期27.13%、後期37.3%)となっており、昨年同様約80%の人がほとんど授業以外に勉強していないことになっており、特に復習ができるようなノートの整理や宿題を出題することにより、より理解度を高めるような努力が必要となる。また、機械工学系では、教育FDを7月末に開催しており、専任と非常勤全員で、良い授業を行うための方策について、今後もFDを通して本学での教育の特徴を考え、さらに、専任と非常勤との連携により共同して、引き続き努力する。

(機械工学系代表 亀井延明)

## ⑤ 理工学部 総合理工学科 電気電子工学系による総評

授業内容の理解に関する Q1 では前期、後期とも 8 割程度「よく理解できた」、「まあまあ理解できた」となっていてまた、Q2 の授業のよかった点に関し、特に「授業の内容」のポイントが前期、後期ともに昨年度と比較して高くなっている結果となっている。Q1, Q2 のアンケート結果から、ここ数年進めてきた、科目を担当する教員の適正配置、ならびに各教科における内容の見直しを行ってきた効果が出てきているものと考えられる。

一方、Q3 の結果から、シラバスを参照しないで科目を受講する学生数がおおよそ 4 分の 1 程度にのぼる状況にある。受講する科目の内容をしっかりと把握し、特に選択科目に関して途中で落伍者してしまう学生を減少させるために、学年最初のガイダンスの際に、シラバスを参照して授業内容を確認することをこれまで以上に学生に指導する必要があるものと考えられる。

Q4 の予習に費やす時間数に関し、予習時間が 60 分以上の層は昨年度とほぼ変わらないものの、予習時間が 15 分未満の層が今年度は増加している。この傾向は学生の学力の 2 極化にもつながっているものと考えられる。学習意欲が低く予習時間が短い学生にいかに関心を高めるよう指導するとともに、教員の側で授業の質を上げていきたい。

(電気電子工学系代表 石田隆張)

## ⑥ 理工学部 総合理工学科 建築学系による総評

授業理解度を問う Q1. で、「理解できた」部類を足した比率は、本学系においては平成 28 年度に引き続き 9 割に近く、特に後期では 9 割を超えており昨年よりもよく理解できた比率が高く、全学の中でも上位に属する。しかし内訳を精査すると、昨年度前期で 42.2 ポイントと飛びぬけて高ポイントであった「よく理解できた」が、今年度では 30.8 ポイントにさがっており原因を究明する必要があると感じている。

授業の良かった点を尋ねる Q2. で、教員とのコミュニケーションについては昨年を引き続き下がっている。また、受講人数については前期 7.7 ポイント後期 6.3 ポイントとなり、受講生が多いことに対してのクラスサイズを昨年位を引き続き、再考する必要があると感じている。授業内容について前期は昨年同様 48 ポイントの高得点であるが、後期が 32. ポイントと 16 ポイントの差があり、昨年とくらべても 7 ポイント下がり原因究明が必要である。

シラバスの活用について問う Q3. でまったく活用しない学生の比率が昨年は 44 ポイントあったことを受け、ガイダンスで注意喚起したことが功を奏して今年度は 31 ポイントに下がったが全学の平均レベルと同等で必ずしも十分でない。引き続きガイダンス時の説明が必要と思われる。予習復習に関しては、昨年と同様、後期になると全くしない学生が 15 ポイント増している。大学に慣れてきてからの授業指導も必要である。

(建築学系代表 村上晶子)

## ⑦ 理工学部 総合理工学科 環境科学系による総評

講義内容の理解度をみると、前期、後期ともに理解できたと答えた割合が80から90%程度となっている。ただ、「まあまあ理解できた」という曖昧な答が一番多く、自信を持って理解できたという割合は20%程度にとどまっている。確実に理解できたと回答することに躊躇していると考え、講義内容を理解していると判断できる。

講義を評価する点としては、「機材・資料・板書」、「授業内容」となっている。理解度を高める道具として機器設備や資料を活用しているが、昨年同様、教員とのコミュニケーションに課題が残る。

シラバスの活用については、「講義内容を確認するため」、「評価基準を参照するため」が高い。JABEE 運用の中で、学系の学習・教育到達目標の達成度評価を実施しており、そのことが評価基準を参照するということにつながっていると思われる。ただ、「予習復習に役立てるため」が、昨年同様、10%程度であり、シラバスの本来の活用目的として低い数字となっている。これは、予習、復習に関して、50%以下が「60分未満」となっており、「15分未満」と「全くしなかった」をあわせると35%ほどいることと関連していると判断できる。しかし、JABEE の教育評価改善会議での意見交換では、実際には多くの宿題を課しており、60分以上かけないと終わらないということがあり、学生のアンケート回答の信頼性を、本年度についても確認する必要がある。

(環境科学系 西浦定継)



### 3) 人文学部

#### ① 人文学部長による総評

設問 1. 「授業内容の理解」については、選択肢「よく理解できた」と「まあまあ理解できた」を合計した値は、人文学部全体では、83.1%である。このことは、本学部における授業の難易度がほぼ適正な水準にあることを示している。

設問 2. 「授業の良かった点」については、本学部の 4 学科の専門性がそれぞれ異なるので、全学科で共通の選択率を高める努力が必要であるとは言えない。(例えば、「教員とのコミュニケーション」が教育上の重点を占める学科もあればそうでない学科もある。また、「教員とのコミュニケーション」が学生にとっていかなる意味で理解されているかも学生間では一様ではないと考えられる。)

設問 3. 「シラバスの活用」について「シラバスを活用しなかった」とする回答は、学科による相違はあるが、33.5%であった。これは、「シラバスを読んだうえで履修登録するという基本的な手順が 1/3 以上の学生に守られていなかったことを示している。この「シラバス活用」の意味と重要性の強調が必要であると思われる。そのためには、履修ガイダンス等で十分な説明と指導と援助が必要になってくる。

また、全学共通科目についてシラバスを活用しなかった学生は、前期 37.0%、後期 55.4%であった。前年のアンケート結果では、前期 24%、後期 28.2%であったが、学部全体よりかなり低かったが、今年はずいぶん学部より高くなっている。これは全体の回収率の低さと関係していると思われる。いずれにしても 1/3 以上の学生がシラバスを活用していないこと自体大きな問題である。学生にシラバス活用の重要性を周知徹底させることが重要であると思われる。

設問 4. 「1 回の授業当たりの予習・復習時間」について、「15 分未満」と「全くしなかった」を合計すると 58.4%と圧倒的に多数である。これは、大半の学生が、授業前後にほとんど勉強をしていないことに等しい。これは、大学という教育機関にとっては、由々しき問題であると考えられる。海外の大学では、図書館は常時満員で一週間に一科目当たり 4 冊から 5 冊の課題図書が指定される。それを読み込んだうえでレポート作成、およびプレゼンテーションなりが行われる。本学においてもかなりの課題をこなしていかなないと単位が取れない仕組みにしていかなないと、ますます勉強しないでアルバイトやレジャーにいそしむ学生が増加するのではないだろうか。改善が望まれるところである。

(人文学部長 馬場康彦)

#### ② 人文学部 国際コミュニケーション学科による総評

平成 28 年度と比べて、Q1 の授業理解度については、「よく理解できた」・「まあまあ理解できた」を合わせて前期は 89.1%と高く、後期は 88.0%と若干低かったが、人文学部全体の平均値(前期=82.9%; 後期=83.9%)と比べると前後期とも、より高い数値であった。その理由を尋ねた Q2 では、昨年度に引き続き「教員とのコミュニケーション」を 1 番の理由に挙げた学生が多かった(前期=33.1%、後期=33.3%)。1 年次から担任制(アカデミック・アドバイザー)を導入し、学生の授業の理解度を確認できる体制を構築したこと、そして、フィールドワークなどのアクティブ・ラーニングを導入したことで学生と教員との距離が近くなったことが、全学の中でも最も評価が高い要因の背景にあると考えられる。

一方、Q4 では、予習・復習に 30 分以上充てている学生の割合は依然として低く、およそ 3 割の学生は予習・復習をしていないことが分かる。他学部・他学科と比べて突出して低いということではないが、全学的に予習・復習の態勢を 1 年次から構築していく必要があるだろう。ただ、アクティブ・ラーニングという体験重視型・グループワーク型の授業の中で、どのように個人の知識の蓄積を図っていくかは、全学的に今後の課題であろう。

(国際コミュニケーション学科主任 深田芳史)

### ③ 人文学部 日本文化学科による総評

例年同様、授業に対する学生の評価は総体に良好であり、これは教員側の抱く感想ともよく一致する結果である。

自由記述欄についても、一覽したところ、酷い批判が数多く寄せられている授業は無いようであった。ただ、28年度とくらべると、No.1「あなたはこれまでの授業内容を理解できましたか？」およびNo.4「あなたは一回あたりの授業に対して予習・復習をどのように活用しましたか？」の数値が微減している。今後のFD研修などで検討し、再上昇を図りたい。

他学科との比較を見ると、Q2.「あなたは、この授業のどこが良かったと思いますか？」において、「d. 授業の内容」を選んだ学生が41.6%と、全学科中最も高いことは喜ばしい。今後も学生が興味を持つ授業の工夫を、学科を挙げて心掛けたい。学科の入学定員を充分満たしつつ、年ごとにレベル・アップする学生の質を、卒業までどこまで保持し研磨できるか。今後も研鑽を続けたい。

(日本文化学科主任 勝又基)

### ④ 人文学部 人間社会学科による総評

Q1「授業内容の理解」については、「理解できた」（「よく理解できた」＋「まあまあ理解できた」）と回答した学生の比率は、前期83.7%（H28年度87.3%）、後期78.6%（同73.4%）であり、昨年と比較しても、ほぼ横ばい傾向である。

Q2「授業の良かった点」については、「授業内容そのものが良かった」を選択した学生は、前期53.2%（同51.5%）、後期53.3%（同51.4%）であり、前年度に続き、回答した学生の半数強が授業内容そのものを評価している。

Q3「シラバス活用」については、「活用しなかった」学生が、前期38.6%、後期54.4%あった。これらの数値は、全学的な傾向と大きく隔たっているわけではないが、シラバスが「なぜあるのか」「何のためにあるのか」を、ガイダンスや日ごろの教育活動のなかで、学生に丁寧に伝えていく必要性を示唆している。

Q4「授業の予習・復習」については、「予習・復習をまったくしなかった」と回答した学生は、前期52.1%（同47.7%）、後期42.4%（同40.5%）と依然多い。予習・復習をそれぞれの科目の学びのプロセスに効果的に位置づけられるような、授業構成の工夫について検討することも、今後の課題のひとつだろう。

(人間社会学科主任 西村純子)

## ⑤ 人文学部 福祉実践学科による総評

「授業内容の理解」にしては、「よく理解できた」「まあまあ理解できた」を合わせて、86.5%以上の学生が理解できたと回答していた（28年度84.3%、27年度83.4%）。

「授業で良かった点」に関しては、「授業の内容」が最も多かった（29年度38.9%、28年度37.7%、27年度37.4%）次いで、「機材・資料・板書」（29年度24.1%、28年度26.5%）「教員とのコミュニケーション」（29年度20.2%、28年度18.4%）多かった。

シラバスの活用法に関しては、「活用しなかった」が最も多く（29年度37.9%、28年度42.6%、27年度49.2%）、次いで、「授業に内容を確認するため」が多かった（29年度29.8%、28年度30.0%）

「予習・復習の程度」に関しては、前期で「全くしなかった」が最も多く（29年度42.8%、28年度46.6%、27年度49.0%）、次いで、「15分未満」が多かった（29年度19.0%、28年度19.9%、27年度20.8%）。

以上の結果からは、学生は、授業内容をほぼ理解しているとの数値を示した。さらに、今年度の学生の理解力を過去2年間と比較すると微増傾向の結果を示し、学習意欲が徐々にではあるが上昇したことによるものと推測される。

「授業で良かった点」に関しては、「授業の内容」が最も多く3年間微増を示したが大きな変化を見ることができなかった。

シラバスの活用法に関しては、過去2年間より多少の改善傾向は示されたが、未だにシラバスの活用が十分にされていない。特に新生生に向けガイダンス時にシラバス参照を徹底して指導しなければならない。

「予習・復習の程度」に関しては、過去2年間と同様に予習・復習などの自律的な学習をしていないことが推測され、このような状況でいかに授業に向けての予習・復習の時間を増やすよう指導するかが課題である。具体的な課題の指示と、そのチェック体制を構築するなど、学科を挙げて具体的に策を講じる必要がある。

（福祉実践学科主任 横倉三郎）

## 4) 経済学部

### ① 経済学部長による総評

授業アンケートに回答した学生からは、学科教員の授業内容・学生対応の項目について、おおむね70%以上の良好な評価を得ている。経済学部では、非常勤講師を除く全教員から自らの点検結果を学科主任及び学部長に報告してもらっているが、私語対策、板書の仕方、授業内容の説明の仕方などについて教員個々が真摯に受け止め、授業改善に向け努力を積み重ねてきたことが学生からの良好な評価に繋がっているものと認識できる。学科主任のコメントにも記されているように、学生の約7割以上が授業内容を理解できたと回答していることは、ほぼ満足すべき結果であろう。

しかし、授業内容の理解及びその発展的学習にとって不可欠となる予習・復習が確保されていないこと、また、授業アンケートの回答率が他学部と比較しても極めて低いという問題点は依然として解消されていない。回答率を上げるために教員個々が様々な工夫・努力を行っているが、成果はあまり見受けられない。いかなるアンケート方式がベストなのか、学部のみならず、大学全体としても真摯に再検討すべきものと思われる。

(経済学部長 佐藤正市)

### ② 経済学部 経済学科による総評

経済学部での全体の集計結果は以下のとおりである。

授業内容の理解は、7割以上(前期73.3%, 後期73.9%)が理解できたと回答した。授業の良かった点は、授業内容(前期37.9%, 後期40.1%) 機材・資料・板書(前期35.0%, 後期38.5%)の順であった。シラバスの活用は、授業内容の確認の比率が高く(前期43.9%, 後期70.6%)活用しなかった比率は全学(前期38.7%, 後期54.5%)とくらべて低かった(前期26.7%, 後期33.3%)。予習・復習にかかる時間が30分以上の学生は3割未満(前期24.9%, 後期29.6%)であり、全くしなかった学生は3割以上(前期35.0%, 後期34.0%)であった。全体の集計結果での大きな問題は見られないものの、予習・復習を授業内で提示しているにもかかわらず、全くしなかった学生が3割以上であることは、アクティブラーニング導入など新規の対応を行う必要があると考える。

経済学部では、非常勤を除く全教員が年度末にアンケート結果に基づいた自己評価を行っており、それらの一部は以下のとおりである。(1) 問題を板書にて解きノートをとらせることで学生の集中力を高める。(2) 自由回答での「板書が見づらい」に対して、書き方を改善する。(3) 授業で学んだことを実践に活かすための指導をさらに意識する。(4) 私語など迷惑行為への対処を工夫する。(5) 自由回答での「早口で聞き取りにくい」に対して、板書や資料の活用、時間配分のバランスなどに気を配り、授業進行を工夫する等の改善が行われている。

(経済学科主任 稲葉由之)

## 5) 情報学部

### ① 情報学部長による総評

全学平均と比較し、授業の理解度は低いように見え、学生のレベルに応じた教育が十分出来ているとは言えないように思われる。一方で、シラバスの活用や、予習復習については、全学平均より良い回答の割合が高いことから考えると、他学部に比べて相対的にはあるが、学生の努力が自己評価に結びついていない現状が表れている。

Q1 の授業内容の理解度については、前年度に引き続き、わずかながらではあるが、理解できたと答える学生の割合が増えた。具体的には、「よく理解できた」は前期 21.0、期 23.4%であり、「まあまあ理解できた」はそれぞれ 54.5%と 55.9%となっており、1,2 ポイント上昇しているという結果であった。一方で理解できていないと回答する学生が 4,5 人に 1 人の割合で存在しているとも言え、授業の到達目標を高く維持するためにも、授業内外での工夫が必要であると考えられる。

Q2 の授業の良かった点については、「機材・資料・板書」と「授業の内容」について、およそ 4 割以上の回答者が良い点として挙げていた。一方で、受講者の人数については「良い」とは思っていないようだが、適切なクラスサイズの設定を検討するにあたり参考にしていきたい。

Q3 のシラバスの活用については、昨年度減少した「活用しなかった」が今年度はおよそ 30%と大きな変化が見られなかった。シラバスを有効活用してもらえよう、記載項目の検討や、記載内容の充実化を図るなど、今後も継続して改善をしていきたい。

Q4 の予習・復習時間についても、全体的には良い傾向が見られる。「全くしなかった」が前期は前年度 32.6%から 29.7%へ、後期は 30.0%から 35.6%へと変化し、「15 分未満」については前期が 17.0%から 15.5%へ、後期が 14.0%から 8.3%へと減少、「30 分未満」については前期が 17.4%から 23.2%へ、後期が 17.0%から 16.0%へと変化、60 分未満については前期が 17.6%から 16.0%へ、期が 20.8%から 18.5%へ減少、「60 分以上」については前期が 15.4%から 15.6%へ、後期が 18.2%から 21.5%へと増加している。後期において二極化が進んでいると見ることもできるかもしれない。進級率低下の一員である可能性もあり、今後の検討課題としていきたい。

Q5 では授業改善に向けた提案などを求める自由記述の設問が設定されている。回答として寄せられた学生の声としては、前年度同様に建設的な意見が多いと感じられた。教材の準備・配布への要望や、授業内の演習時間が少ないといった不満、演習課題等の解説・解答の充実を求める声今年度も見られた。また、特にコンピュータ演習の時間が多い科目において、SA の増員を提案する声が多く見られ、教材等の工夫に加えて補助教員の充実化も検討していきたい。

(情報学部長 篠原聡)

## 6) 教育学部

### ① 教育学部長による総評

教育学部で開講されている科目数と在籍する学生数から判断して、学生による授業アンケートの回収率は前期・後期を通して三分の一程度と推定される。今年度に限ったことではないが今回の集計結果は全教育学部生の回答ではない点に留意する必要がある。その上で描き出される学生の姿、授業に対する評価は、ほぼ例年通りとなった。すなわち、半数の学生はシラバスを確認することがなく、ほとんどの学生は十分な予習・復習もしていない。この状況において、ほとんどの学生が授業内容を理解できたという自己評価を下している。

今日、多くの教員は担当授業において、小テスト、リアクションペーパー、出欠確認票などを利用して、授業改善に向けた努力を日々に行なっている。これらが、授業の良かった点として「内容」と並んで「教員とのコミュニケーション」と回答されることに繋がっているものと考えられる。しかし翻ってみると、大学における単位構成要件に必須の自学自習を欠いたままで理解できる授業とはいかなるものであろう。現在進行中のカリキュラム改定を含む一連の努力が、学生をさらなる高みに導くことを祈る。

(教育学部長 富樫伸)

## 7) 経営学部

### ① 経営学部長による総評

各質問に関するコメントを示す。

[1: あなたはこれまでの授業内容を理解できましたか] という設問に関しては、「よく理解できた」と「まあまあ理解できた」の合計が、前期では84.7%と昨年よりも若干低下はしているが、後期は88%と昨年と同じパーセンテージを示しており、全学の総計と比較しても高い割合となっており、大部分の学生が授業内容を理解していることがわかる。

[2: あなたは、この授業のどこが良かったと思いますか?] という設問に関しては、前期後期ともに「授業の内容」が前期30.6%、後期29.8%と高い評価で、以下、「教員とのコミュニケーション: 前期23.1%、後期25.9%」、「機材・資料・板書: 前期22.9%、後期23.1%」となっており、3割強の学生が「授業の内容」を評価の第1位に挙げている。経営学部が実施している体験型授業が学生に受け入れられ、理論だけに偏らない実践的な経営学の授業内容が評価されていると思われる。

[3. あなたはこの授業を受けるにあたって、シラバスをどのように活用しましたか?] という設問に関しては、「活用しなかった: 前期38.7%、後期37.2%」と、昨年前後期とあまり変わらない数字となった。また、「授業の内容を確認するため: 前期32.6%、後期34.7%」とこれも昨年度とあまり変わらない数字となった。この結果から、シラバスが次第に有効活用されるためには、授業開始時でのガイダンスなどでシラバスの内容を受講者により周知させる工夫が必要であると思われる。

[4. あなたは1回あたりの授業に対して予習・復習をどの程度しましたか?] という設問に関しては、「全くしなかった: 前期31.3%、後期34.5%」が最も多いが、残念ながら昨年度より少し増加している。「30分未満: 前期21.5%、後期19.3%」が続き、以下、「15分未満: 前期19.2%、後期20.3%」、「60分未満: 前期15.3%、後期13.4%」、「60分以上: 前期12.7%、後期12.4%」という結果である。「全くしなかった」との回答が依然として多いことは危惧されるが、経営学部ではゼミナールをはじめとして、授業時間帯以外で実施される演習型の授業が多く開講されており、また学生の授業時間帯以外での演習への参加度合いも多いため、これらの時間が予習・復習の時間に含まれていないためと思われる。授業時間帯以外での演習参加時間が授業時間を上回っているものが多く、このデータだけ学生の勉学意欲が劣っていると判断することはできないと思われる。

(経営学部長 山口幸三)

## 8) デザイン学部

### ① デザイン学部長による総評

デザイン学部の結果は、平成 29 年度も全般的にかなり良好であった。

設問 1 「授業内容の理解度」については、「よく理解できた」と「まあまあ理解できた」を合わせた数字は、前期 88.5%、後期 92.6%と安定して非常に高く、どちらも全学部で 1 位である。これは恒常的な授業改善を徹底している結果と考えられる。

設問 2 「授業の良かった点」については、「授業の内容」と「教員とのコミュニケーション」が特に重要な項目と考えられるが、この 2 つを合わせた数字も、前期 60.7%、後期では 62.0%で、全学部で 1 位となった。

設問 3 「シラバスの活用」については、「活用しなかった」が、前期 25.7%、後期 26.6%であり、全学平均と比べて良好である。また昨年度と比べて特に前期が改善された。ただしデザイン学部では、最初の授業でシラバスを履修者に配付して授業内容を説明している。学生はシラバスよりも教員が用意する詳細なレジメを活用することが多いために、この設問では実際よりも消極的な回答になった可能性が高い。

設問 4 「1 回の授業あたりの予習・復習時間」については、「60 分以上」と回答した率は前期 23.6%、後期 37.4%で、全学平均に比べて圧倒的に高い。また昨年度と比べても、さらに改善されている。特に演習・実技系科目では、毎回相当の準備が要求されるため、実際には学生は、アンケート結果よりもはるかに多く授業時間外での学習を行っていることは間違いない。

(デザイン学部長 西本剛己)



## 9)心理学部

### ① 心理学部長による総評

#### 1. 結果についての概観

授業内容の理解(Q1)については、前期・後期とも、「よく理解できた」と「まあまあ理解できた」の選択率を合算すると、約84%の学生が授業を概ね理解できていると考えられる。授業の良かった点(Q2)については、前期・後期とも、「授業の内容」と「器材・資料・板書」の選択率(回答数比)を合算すると、約68~69%となり、教員だけが一方的に直接コントロールできるわけではない「受講者の数」や、「教員とのコミュニケーション」といった選択肢の選択率(回答数比)を上回っていることから、心理学科においては、授業内容や授業技術など個々の教員が自ら工夫・改善できる面については、教員は概ね十分な努力を行っていると言える。

一方、シラバスの活用状況(Q3)については、「活用しなかった」者が、4割近くを占めており、シラバスを活用している学生でもその目的は「授業内容の確認」と「評価基準の確認」がほとんどを占めている。シラバスが「個々の授業の目的や学生の到達目標を示した学びの指針」であることを理解させる工夫が必要である。

また、授業外での自発的な学修の頻度(Q4)については、3割近くの学生が、1回の授業あたり60分以上の予習をしているのに対して、4割近くの学生は、全く予習をしていない。科目の特性にも配慮しつつ、予習・復習の重要性やその効果について、一層丁寧に指導していく必要がある。授業外の学修についてはシラバスに記載しているが、上に述べた通りシラバスの熟読についても徹底していく必要がある。

#### 2. 結果を踏まえた改善方針

Q1 前期 「よく理解できた」(24.8%)と「まあまあ理解できた」(59.2%)を合わせると、84.0%が、授業を概ね理解できていると考えられる。

後期 「よく理解できた」(28.6%)と「まあまあ理解できた」(55.6%)を合わせると、84.2%が、授業を概ね理解できていると考えられる。

Q2 前期 (回答数比)「授業の内容」36.3% 「器材・資料・板書」31.8%  
合算して68.1%

後期 「授業の内容」37.8% 「器材・資料・板書」31.8%  
合算して69.6%

Q3 前期 (回答数比)「授業内容の確認」33.3% 「評価基準の確認」20.1%  
「活用しなかった」35.3%

後期 (回答数比)「授業内容の確認」37.3% 「評価基準の確認」24.2%  
「活用しなかった」46.0%

Q4 前期 「全くしなかった」38.7%  
後期 「全くしなかった」49.5%

Q1およびQ2の結果から、授業内容や授業技術など教員が直接改善できる面について、さらに各教員が改善の取り組みを進めるとともに、授業を成立させるもう一方の主役である学生諸君にも主体的・自律的に授業に参画してもらえよう、Q3およびQ4の結果を踏まえて、年度当初の履修ガイダンスにおいて、「個々の授業の目的や学生の到達目標を示した学びの指針」としてのシラバスの意義について周知するよう取り組みたい。

(心理学部長 境敦史)

## 1 0) 全学共通教育委員会

### ① 全学共通教育 委員長による講評

平成 29 年度の授業アンケートの結果を項目ごとに検討した結果を以下に記します。

Q1 の授業内容の理解度については、「よく理解できた」「まあまあ理解できた」を合わせた割合が、前期が 81.6%、後期が 84.6%であり、平成 28 年度の結果がそれぞれ 81.0%、84.3%、平成 27 年の結果がそれぞれ 80.7%、82.6%であったことを勘案すると、徐々にではあるが、年々向上していることがわかる。

ただ、「全く理解できなかった」と回答している学生の割合が、前期、後期ともに 4.4%いることはいささか問題であり、授業内容のわかりやすさを高めるために改善を図っていかねばならないと考えている。

Q2 については、授業の良かった点として「授業の内容」を挙げている回答割合が、前期 43.7%、後期 40.3%と選択肢の中で最も高く、授業内容についての満足度は比較的高いことが窺われる。

Q3 のシラバス活用についての質問では、「活用しなかった」と答えた割合が、前期 38.1%、後期 55.4%であり、4 割から 5 割の学生がシラバスを読まずに履修登録をしていることになる。このことは、電子媒体だけという現在のシラバスのあり方と履修登録の慌ただしさを見直す必要があることを如実に物語っているように思われる。特に全学共通科目は、ある程度「縛り」がかかっている学科の専門科目とは異なり、学生が授業内容を理解して主体的に選択して始めて教育効果が上がるという側面が強いので、学生にシラバスを読んでももらえないことは大きな問題である。シラバスの当該ページに掲載されている個別の認識コード番号を入力させるなど、少なくともシラバスを一度は開かなければ履修登録ができないような方法を考える必要があるのではなかろうか。

Q4 の予習復習に関する質問では、「全くしなかった」と回答した割合が、前期 43.3%、後期 40.2%という高い数値を示している。4 割以上の学生が予習も復習もしていないというのは由々しき問題であり、学生諸君を予習復習に導くような工夫が必要であることは確かであろう。

(全学共通教育委員長 林雄介)